

世相史の可能性

SHIGENOBU Yukihiro
重信 幸彦

国立歴史民俗博物館

町の問題としての高層集合住宅

今日のシンポジウムで、中国、韓国、日本の高層集合住宅の暮らしに関する報告を聴いていて、高層集合住宅というのは、団地や都市の再開発のようにはじめから一つの街としてつくられる場合は別として、基本的に、一つの建物のなかに閉ざされた空間なのだということを改めて考えさせられました。共用スペースがあるとしても、それはやはり居住者を前提にしているように見えます。

私は、この6、7年ほど、福岡県の福岡市博多区の、近世から続くある町内について調べごとを続けています。実はこの町内が現在かかえている問題の一つがマンションです。歴史のある商店街を擁し、山笠やどんたくなどの有名な祭礼を維持している博多の町場の一つなのですが、この数年で決して広くはない町内に、ワンルームのマンションを含めて、3棟のマンションがたちました。このマンションの住人が、地域の町内組織や町内の活動と没交渉で、その分、結果的に町場の活力が損なわれていくことが問題になっています。

古くからの店が、後継者が居ないなどの理由で店舗を閉じると、ディベロッパーが土地を買います。一時コインパーキングにして、まわりに一定の広さが確保できると、高層集合住宅をたてていきます。

以前は、自治体がマンションの住民に関する情報を町内会に伝えてくれたので、それをもとに戸別に、町内会への勧誘と説得をしていたといえます。しかし個人情報保護法施行以後は、自治体からの情報提供が一切なくなり、それまでも決して容易ではなかったマンションの住民に対する町内会への勧誘が、さらに難しくなっていました。

マンション住人は、そんな事情に、あまり関心はないようです。

町内で古くから商店を営む人のなかには、町内会や商店会が中心になって、もっと積極的に、これ以上のマンション建設に対して反対運動をおこすべきだ、という意見を持っている人もいます。

現在、町内会では、マンション建設の地元説明会があると出かけていって、町内との関わり方の重視をディベロッパーにうたっているようですが、効果はあまりなく、町の人たちは「しかたがないか」と半ばあきらめ顔でマンションを見上げています。

きっと高層集合住宅のなかには共用スペースが工夫された快適な住居なのでしょうが、結局、そうした高層集合住宅の出現が、その外側の街の暮らしを痩せさせてしまうという現実もあるのだと思います。こうした問題は韓国や中国ではどうなっているのでしょうか。

ないものねだりになってしまうかもしれませんが、そもそも高層集合住宅を問題にした今回のシンポジウムは、なぜもっぱら内側の暮らしに視線が及ぼされているのか。そのことそのも

のに、問い質すべき「当たり前」が潜んでいるのではないかとも思いました。

日本の民俗学の役割としての「世相解説」

さて、日本の民俗学には、「世相解説」という考え方があり、それは民俗学が目の前の日常生活の現実とどう向き合うか、その方法すなわち態度に関わっています。

日本の民俗学のフレームをつくった柳田国男は、自らが構想した民俗学の役割として、「世相解説」をおこなうことを掲げていました。柳田国男は、その著書『明治大正史世相篇』（1931、以下『世相篇』）によって、日常生活の歴史としての「世相史」を語ることにより「世相解説」をおこなうというかたちを具体的に提示しました。同書は、農業経済史家であるとともに農政にたずさわる官僚であった柳田国男と、後に民俗学を構想する柳田国男の、結節点にあたる著書として、とても重要な意味を持っています。

『世相篇』は、昭和恐慌のあおりを受けて、疲弊し窮乏した農村の暮らしに焦点を絞り、農村はなぜ窮乏したのか、その原因を、明治・大正期の約60年間の地方・農村の日常生活の変化のなかに多角的に探ろうとしました。ここで『世相篇』の内容に詳しく立ち入ることはできませんが、一見すると些細な日常の事物事象の叙述が並んでいるだけのように見えます。明治大正期という日本の近代を語る歴史書を標榜しながら、たとえば対外戦争も、繰り返された小作争議や労働争議も出てこなければ、また近代史の表舞台に出てくる歴史上の人物の固有名詞も一切出てきません。それが、変化するともなく確実に変化している日常生活の歴史、すなわち「世相史」により「世相解説」をおこなっていくための戦略的なかたちだったのです。

「世相」という態度と視線

「世相」とは、ごく一般的に使われる、世の中のありさまを広く意味する日本語の一つです。しかし柳田国男は、この「世相」をとても戦略的な意味で使っていたのではないかと思います。簡単にいうと、「世相」とは、私たち自身が日常生活において現在経験し、またこれまでに経験してきた「眼前に出ては消える事実」[柳田 1931 → 1998:337]にもとづき歴史を語ることができる、という態度すなわち方法を意味しているのです。

『世相篇』のなかで、柳田は、農村の暮らしが、明治大正期の約60年という年月のなかで、どのように変化したのかを明らかにしようとしてきました。この60年という時間の幅が、一人の人間が経験しうる時間であることは、「世相」という方法の要件の一つだったのではないのでしょうか。60年という時間は現在にあてはめれば、ほぼ第二次世界大戦後から今日にいたる時間に重なります。

一人の人の経験と重なりうるその時間の幅が、「実験の歴史」というもう一つの重要な考え方に接続します。『世相篇』の第1章で、柳田は「実験の歴史」について述べています。それは、「最近に過去の部に編入せられた今までの状態と、各自が直接に比較することの出来る事実」にもとづき、誰に「指導説明」されなくとも、「多くの仲間の者と共々に、黙って其の経路を理解」することができる歴史であり、その歴史の実践は、出来るだけ「多数の者が、一様に且つ容易に実験しうる」事柄、つまり日常生活における衣食住などから進めていくことができるのだと

います [柳田 1931 → 1998:343]。ここで、「実験」とは、experiment という意味ではなく、むしろ experience / 経験 という意味で使われています。

つまり柳田がいう「実験の歴史」とは、一人ひとりが暮らしのなかで経験してきた事象のなかで、既に過去の経験になった事象と、各自がまさに目下経験している事象があり、それらを比較することで、誰の説明をうけずとも、自分たちの暮らしの変化を理解することができるという意味での歴史です。

そして、この「実験の歴史」という発想は、当時の帝国大学などで専門的な知の技法を習得した専門家の指導によるのではなく、普通の人びとが、自らの日常の経験を元手にして具体化する知の実践として、構想されていたことも押さえておく必要があるでしょう。

「当たり前」の相対化とあきらめないこと

今、眼前の事実として「当たり前」だと思っていることが、どのようにそのようになったのか、普通に生活をしている人たちが、自らの等身大の経験から、その生活の変化すなわち歴史を知ることを、柳田は「世相史」としたのです。

この「世相史」にどのような可能性が構想されていたのでしょうか。『世相篇』のなかで、繰り返し主張されていることは、同じ問題を抱えたもの同志が互いの事情を知り、自覚的に問題を共有し団結することでした。互いの事情を知るとは、さきほどの自らの現在の経験と過去の経験を比較することが第1の比較なら、自分の経験と、他所で生きる他者の経験との比較という第2の過程が構想されていたことを意味しています。

この「実験の歴史」として具体化される「世相史」は、私たちが自分ひとりの不幸や理不尽として抱え込んでいる問題は、決して独りひとりの問題ではなく、世の中全体の仕組みの問題であるという確信に基づいていたはずで

そうした「世相史」の目的はどこにあったのでしょうか。柳田が執筆した日本における民俗学の最初の概説書『郷土生活の研究法』（1935）では、私たちが、日常生活のなかで何か問題を感じていても、そのような問題の原因や歴史的背景について、しばしば「そんな事を知ろうとしたとて判るものか」といい、「あたりまえじゃないか」とか、「世の中はそんなものなのだ」といって、なぜそうなのか、その経緯を問いもせずにあきらめてしまうことをいさめています [柳田 1931 → 1998:203-204]。

つまり、「当たり前」は、こうした「あきらめ」と背中合わせのものとして現出するのです。

「世相史」の目的は、まず、問題を抱えた普通の人びとが、あきらめないようにすることでした。なぜ問題はそのように存在しているのか、自分たちが「当たり前」と考えていることがそうなった経緯すなわち歴史を知ることによって、「当たり前」が決して「当たり前」ではないことを知って初めて、その問題になっている状況を変えていく一歩を踏み出すことができます。

「問題」の自覚と「日常化」批判の射程

このような、「世相史」を説くことを通して「世相解説」をおこなうという柳田の発想と、

本日のシンポジウムの問いかけを重ねてみると、柳田の「世相史」という考え方においては、問うべき問題は、すでに私たちが抱え込んで悩んでいる、つまり問題が意識化されていることが前提になっていたのですが、本日の「当たり前」を問う！」と題されたシンポジウムでは、その悩みや問題が最初に具体的に提示されていたわけではありません。

むしろ、韓国、中国、日本それぞれに馴染み深いものになっている高層集合住宅の暮らしと比較することから、それぞれの「当たり前」を相対化していこうとしていました。では、韓国も中国も日本も、比較を通して自分たちの高層集合住宅の「当たり前」を相対化して、その次に、何がくるのでしょうか。

今、私は、このシンポジウムは、まず何より、現在の私たちが、自らが背負わされている日常の矛盾や問題を「自覚」しにくい状況にあるという現実に向き合っていたのではないかと感じています。実は、それ自体が私たちにとっての大きな問題だというべきかもしれません。

それは、今回のシンポジウムで議論になっていた「当たり前」のつくられ方の問題として考えることもできます。

私たちの暮らしのあるべき姿や理想像を語り続けるメディアの情報や、暮らしそのものを作り上げていく近代的な市場経済などの制度が、「当たり前」のイメージを私たちに刷り込んでいく過程を批判的に検討することも大切ですが、今回の報告で話題になっていたのは、私たちが与えられた制度や仕掛け、モノ、道具などを使いこなしていくこと自体が「当たり前」を生み出す可能性でした。

たとえば、岩本さんは報告のなかで、「日常化」ということばを使い、私たちが与えられた均一な制度や仕組みを、自分の文脈で飼いながら「当たり前」なものにしていく過程に触れました。それは南さんの報告で、与えられた既存の集合住宅のかたちを、韓国の既存の慣習を使って使いこなし「土着化」していく過程として語られたことと重なっています。私たちはそこに、日常生活を作り出していく知恵や工夫を発見することができます。

しかし、こうした「日常化」「土着化」の過程には、均一な制度や仕掛けを自分の文脈で使いこなしていく積極的な意味がある一方で、かえってなんとかやりくりしてしまうことにより、そうした制度や仕組みによって私たちが背負わされている理不尽や矛盾などの問題を、意識化しにくくなるという危うい一面もあるのではないのでしょうか。

本日のシンポジウムの目指す先には、その危うさを見据え、「当たり前」の向こう側にうずもれた理不尽や問題を、改めて発見し指摘する学問としての民俗学という筋道がひかれ得るようにも見えます。

とすれば、中国、韓国そして日本は、本日のシンポジウムを通して、それぞれの「当たり前」を問い質し、それぞれのどのような問題を発見し得たのでしょうか。

今、私は、やはりあの博多の街かどで、町内に建ち並び始めた高層集合住宅を仰ぎ見ながら、違和感を抱きつつも「しかたがないか」とつぶやく町の人たちの視線から高層集合住宅を考えてみようかと、思っているところです。

参考文献

柳田國男 1931『明治大正史世相篇』（『柳田國男全集5』筑摩書房、1998）

柳田國男 1935『郷土生活の研究法』（『柳田國男全集8』筑摩書房、1998）